デジタルライブラリーの国際会議 (Joint JCDL/ICADL 2010) に参加して

日 程 2010年6月21日(月)～25日(金)

場 所 ゴールドコースト(オーストラリア)

主 催 ACM(Association for Computing Machinery), IEEE

情報管理 53(6), 338-340, doi: 10.1241/johokanri.53.338 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.53.338>)

オーストラリアで3番目の都市であるブリスベンの近郊にありサーフィンなどで知られているゴールドコーストで6月21日から25日までデジタルライブラリーに関する国際会議International Digital Libraries Conference (Joint JCDL/ICADL 2010) が開催された。

もともと、別個の国際会議として開催されてきた米国コンピュータ学会 (Association for Computing Machinery: ACM) と米国電気電子学会 (IEEE) の共催によるデジタルライブラリーの国際会議 (JCDL) と、アジア・太平洋地区のデジタルライブラリーの国際会議 (ICADL) が、初めて同時にオーストラリアのゴールドコーストで開催され、世界各地から研究者、技術者、図書館関係者など200名以上が参加した。

発表論文の募集は別々に行われ、審査や採択および研究発表のセッションもそれぞれ別個に実施されたが、ワークショップ、全体会、チュートリアルなどは共同で開催された。今回の会議では、フルペーパーとショートペーパーを合わせた発表数はICADLが30件、JCDLが45件であり、3日間で合計75件の研究発表が行われた。この他に、19件のポスター発表と10件のデモ (実演) があった。

JCDLとICADLは2001年と1998年に、それぞれ1回目の会議をスタートしており、本年でそれぞれ9年目と12年目となる。この間、Web上での各種サービスは大きく進展し、多様なサービスが実現している。これらの変化はデジタルライブラリーへの期待やあり方にも大きな変更を迫っていると言えよう。今回、初めて実施された合同会議では、デジタルライブラリー研究の今後の方向性や将来のデジタルライブラリーが果たすべき役割の範疇^{はんちゅう}などをめぐっての発表や議論が多く見られた。

JCDLは、今回の国際会議のテーマとして、10年前と10年後の過去と将来を考え、「10年後の2020年に向けた現在のデジタルライブラリー概念を超えたビジョンの構築」をテーマとして掲げた。

一方、ICADLは、今回の会議のテーマとして、「グローバルな変化の時代におけるデジタルライブラリーの役割」を掲げた。合同国際会議で発表される研究論文は、情報技術、情報学、図書館員のあり方、保存科学や技術など研究だけでなく実践的な事例も含めた幅広い分野から募集された。

会議の初日 (21日) には、博士課程の大学院生など若手研究者の研究支援を目的としたドクトラル・コンソーシアムや、「マルチメディア情報検索」、「デジタルライブラリー入門」、「デジタルライブラリー利用者への簡易調査法」、「Web上のデジタルライブラリーを管理するためのデジタル・エコシステム」などのテーマでチュートリアル・セッションが開催された。

写真1 「マルチメディア情報検索」セッション

写真2 キーノート「知識を可視化する」

筆者が参加した「マルチメディア情報検索」のセッションでは、英国のオープンユニバーシティ（Open University）のノレッジメディア研究所スザンヌ・リトル（Suzanne Little）研究員が講師を務め、写真、ビデオ、音声などからなるマルチメディアコンテンツの内容を表現するテキストの自動作成や最近のマルチメディアコンテンツ検索システムの進展状況を紹介し、参加者との意見交換を交えながら進められた。

本会議（22日）では、開会のあいさつに続いて、インディアナ大学図書館情報学のケーティ・ベルナー（Katy Börner）教授により、「知識を可視化する」（Envisioning Knowledge）と題してキーノートスピーチが行われた。近年利用可能となった科学技術に関する多くのデータセットを分析し、科学技術情報や知識を地図上にプロットすることで、顕在化されていない知識間の関連性などを浮かび上がらせられることを、自身で作成したマップを用いて紹介された。

共同開催の会議では、アノテーションとマークアップ、遺産・継承物のデジタルライブラリー、学術出版、検索、アノテーションと共同、国際的なコンテキストにおけるデジタルライブラリー、歴史的テキストや文書、モビリティと移動、自然言語処理など、多くのセッションで、研究報告がなされた。

筆者は、3年以上にわたり鶴見大学の原田教授、元

木准教授との共同研究として、実施してきた「デジタルテキストへの学生によるコメントの付与が最終成績に与える影響について」の研究発表を行った。幸い多くの参加者に関心を持ってもらえたようである。2日目（22日）の夕刻に、ポスター展示やデモ（実演）の発表者が壇上でスライド1枚を使って1分間の持ち時間内で、順番に自分の研究の紹介をする「ミニッツ・マッドネス」（Minute Madness）が開催された。その後にポスター展示・デモ（実演）会場に移動して、軽い食事をしながら関心のある発表者のところに行き、詳しく説明を聞けるようにスケジュールされていた。

3日目のキーノートスピーチは、スタンフォード大学図書館LOCKSSプログラムの主任研究員であるデビッド・ローゼンタール（David Rosenthal）氏により、「同じ川に再び入る」と題して行われた。LOCKSS（Lots of Copies Keep Stuff Safe）プログラムは、e-コンテンツを収集・保存するためのツールを各図書館に提供したり、支援するための国際的なプロジェクトである。

ローゼンタール氏は、Webはもちろんそれ以前の先行技術を背景とし成長してきた。最初はスタティックなテキスト中心のコンテンツから開始されたが、HTMLフォーマットだけでなくHTTPのサービス上で、他のフォーマットも含めて提供されている点が重要

写真3 著者の発表

であり、デジタルコンテンツを保存していく上でも、現在の双方向性が高いWebを前提にして新しいモデルを検討する必要があると指摘し、そのひとつの事例として、スタンフォード大学図書館で提供している「HighWire Press」を紹介された。

4日目のキーノートスピーチは、マイクロソフト研究所の主任研究員であるカーティス・ウォン（Curtis Wong）氏により「ワールドワイド・テレスコープとTUVAプロジェクトに、将来のデジタルライブラリーの姿を探求する」と題して行われた。2008年に開始されたワールドワイド・テレスコープは、利用者が宇宙の特定場所を詳しく見ることができるなど視覚

的な利用環境を強く意識したものとなっている。また、2009年に開始されたTUVAプロジェクトでは保存したビデオを利用者のノートなどと連携させ利用環境を改善したことが示された。このような双方向的なプロジェクトは、将来のデジタルライブラリーのひとつのあり方を示していると指摘された。

「コンピューター科学、情報学、デジタルライブラリー、Web科学の間の相違は内在的なものなのか表面的なものなのか」と題してのパネルでは、複数の国のパネラーから、それぞれの国内での独自状況も含めて、各研究領域間の関係について紹介され、これらの領域をまたいだ専門家の養成について述べられた。

今回の国際会議は、JCDLは2011年6月にカナダのオタワで開催され、また、アジアを中心とするICADLは2011年10月に、北京の清華大学で開催されることになった。

今後、AmazonやGoogleなどにより、Web上での双方向性サービスがさらに展開されるであろう状況の中で、デジタルライブラリーの新たな役割を探求していくことが求められており、JCDLとICADLの果たしていく役割はさらに大きくなろう。

（鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科 長塚隆）